

性・生・制を 考える

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)
第14回男女共同参画シンポジウム

平成30年

1月28日[日]

13:00~17:00

開催場所

東北大学 星陵キャンパス
医学部開設
百周年記念ホール
(星陵オーデトリウム)

主催

東北大学男女共同参画委員会



TOHOKU
UNIVERSITY

ごあいさつ

開会にあたり、一言ご挨拶いたします。

はじめに、このたび第14回目の東北大学男女共同参画シンポジウムを開催できますことに、深く御礼を申し上げます。

さて、本シンポジウムの開催にあたり、今回のシンポジウムに期待していることについてお話しさせていただきます。

このシンポジウムを実施する東北大学男女共同参画委員会は、平成11年6月の「男女共同参画社会基本法」成立と、平成12年5月の国立大学協会ワーキング・グループの報告を契機として、平成13年4月に本学に設置されました。

以来、男女共同参画推進のための東北大学宣言の策定、男女共同参画にかかる研究や取組を奨励する沢柳賞の創設などにより、本学における男女共同参画意識の醸成、学内保育施設の設置など仕事と育児・介護の両立支援策の充実を図ってまいりました。

また、平成28年度は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境イニシアティブ(特色型)」に採択されました。「杜の都女性研究者エンパワーメント事業」と名付けたこの事業では、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や、女性研究者の研究力向上のための取組、および上位職への積極採用に向けた取組を進めていくことにしており、平成33年度までに女性教員比率を19%に引き上げることを目指しています。

一方、毎年シンポジウムを開催することにより、本学における男女共同参画推進の取組をその都度振り返り、大学の役割や推進施策などについて議論を重ね、今回は第14回目の開催となります。

毎回主要テーマを設けていますが、今回は、社会における男女の関係は、生きる上での自然な違い、性による区別、制度としての平等、そして、男女共同参画というステージに変遷してきたことから、今後、性をどのように取り扱い、どのような枠組みが必要なのかを考えるため、「性・生・制を考える」というテーマにいたしました。本学におけるこれまでの取組状況を振り返りながら、本日お集まりの皆様とともに考え、議論したいと考えております。

本日は、来賓として国立研究開発法人 科学技術振興機構プログラム主管 山村康子氏にお越しいただきご挨拶を頂戴することにしております。

また、今年で4回目となる澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(通称澤柳記念賞)の授賞式、及びその受賞者である国立大学法人三重大学 名誉教授 小川眞里子氏、国際医療福祉大学 成田看護学部 助教 古山陽一氏による受賞講演もお願いしております。

さらに、基調講演として内閣府総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員 原山優子氏に『変わりゆく社会に「人」の普遍性を探る ～ジェンダーの視点から～』というタイトルでご講演いただきます。そしてパネルディスカッションは「性を生かす制! ?」というテーマで丸の内の森レディースクリニック 医師 宋美玄氏、東北 HIV コミュニケーションズ代表 レインボー・アドボケイツ東北代表 小浜耕治氏、本学の経済学研究科 高齢経済社会研究センター長・教授である吉田浩氏にお話しいただいた後、パネルディスカッションにて今後の方向性を探ります。

このように多くの方々にご協力いただき、本日のシンポジウムを開催できることを大変光栄に思います。

最後に、本シンポジウムが、本日お集まりの皆様それぞれの立場で、男女共同参画の推進についてお考えいただく契機になりますとともに、この議論が、本学の研究・教育の発展、ひいてはこれからの男女共同参画社会の推進に大きく寄与していくことを祈念し、私の挨拶といたします。



東北大学 総長
里見 進

平成30年1月28日

性・生・制を考える

プログラム

総合司会

男女共同参画委員会委員 広報・シンポジウム WG 経済学研究科 教授 西出 優子

開会挨拶

東北大学 総長 里見 進 13:00

来賓挨拶

国立研究開発法人 科学技術振興機構プログラム主管 山村 康子氏 13:05

第 I 部

13:10-14:05

第4回 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞(澤柳記念賞)授賞式及び講演会

A賞

国立大学法人三重大学 名誉教授 小川 眞里子氏

B賞

国際医療福祉大学 成田看護学部 助教 古山 陽一氏

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

男女共同参画推進センター 副センター長、医工学研究科/工学研究科 教授 田中 真美

..... 休憩 (14:05 ~ 14:20)

第 II 部

14:20-15:10

特別講演 変わりゆく社会に「人」の普遍性を探る ~ジェンダーの視点から~

内閣府総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員 原山 優子氏

座長: 総長特別補佐(男女共同参画担当)、男女共同参画推進センター 副センター長、医学系研究科 教授 大隅 典子

..... 休憩 (15:10 ~ 15:25)

第 III 部

15:25-16:50

パネルディスカッション

性を生かす制!?

パネリスト:

内閣府総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員 原山 優子氏

丸の内の森レディースクリニック 医師 宋 美玄氏

東北 HIV コミュニケーションズ代表 レインボー・アドボケイツ東北代表 小浜 耕治氏

東北大学経済学研究科 高齢経済社会研究センター長・教授 吉田 浩氏

コーディネーター:

男女共同参画委員会 委員、広報・シンポジウム WG 座長、医学系研究科 教授 山内 正憲

講評・閉会挨拶

男女共同参画委員会 委員長 植木 俊哉 16:50

閉会

17:00

来賓

国立研究開発法人
科学技術振興機構プログラム主管

山村 康子氏

澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞 歴代受賞者

第1回 (平成26年度)	A賞	日本の男女共同参画社会の推進を牽引する先導的活動について 明治大学法科大学院 教授 辻村みよ子氏
	B賞	サイエンス・エンジェル修了生を中心とした有志団体による男女共同参画への取組み SA輝友会
第2回 (平成27年度)	A賞	日本の理工系女性研究者支援を牽引した先導的活動 日本大学薬学部・薬学研究所 上席研究員 大坪 久子氏
	B賞	“新大 Wits”による出前授業活動から生まれた男女共同参画多世代キャリア教育 新大 Wits
第3回 (平成28年度)	A賞	大学における男女共同参画推進事業のモデル化による国際的拠点化 名古屋大学男女共同参画室
	B賞	該当なし

A賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、特段に優れた成果を挙げている個人又はグループ

B賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

東北大学内外に関わらず男女共同参画に関する研究や活動について、顕著な成果を挙げている、あるいは顕著な活躍を行っており、今後一層の成果や活躍が期待される若手(42歳以下)の個人又は若手で構成されるグループ



第3回澤柳記念賞授賞式
名古屋大学男女共同参画室



第3回澤柳記念賞受賞講演
名古屋大学男女共同参画室 准教授 三枝麻由美氏

第4回「澤柳記念賞」



第4回澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞審査結果及び講評

男女共同参画委員会 委員長 植木 俊哉

本学では、平成15年度より10年間にわたり、東北大学における男女共同参画を推進するため、「東北大学男女共同参画奨励賞（通称：沢柳賞）」として、教職員及び学生の皆さんの男女共同参画に関連する研究や活動を奨励してきました。

平成26年、さらなる男女共同参画社会を目指し、沢柳賞を改め、「澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞（通称：澤柳記念賞）」を創設しました。この賞は、アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰する目的で設置しました。これまでの沢柳賞と異なり、学内だけでなく学外からも広く公募することで、より多くの方へ男女共同参画推進の理念を広げたいと考えています。

名称は、東北大学の理念である「門戸開放」の方針を打ち出し、全国に先駆けて女子学生に帝国大学の門戸を開く素地を作った初代総長澤柳政太郎の功績にちなんでいます。澤柳記念賞は、本賞のほか、42歳以下の若手を奨励する目的で設置された奨励賞の2部門からなります。審査においては男女共同参画に関連する研究や活動の奨励、男女共同参画社会実現へ向けての積極的な提言や企画を重視しています。

厳正な審査により、以下のように受賞者が決まりましたので、審査の講評とあわせてご報告いたします。

第4回（平成29年度）澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

A賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

課題名 科学技術とジェンダー：歴史と展望の探究
受賞者 国立大学法人 三重大学 名誉教授 小川 眞里子 氏
講評 同氏は所属大学において、長年にわたりジェンダー・女性研究者について教育研究の両面から取り組み、多くの業績をあげていること、管理運営面においては、男女共同参画の理念の普及やその実践に多大な貢献をしたものと認められる。また、同大学の男女共同参画の在り方のみならず、三重県行政とも連携を深め、男女共同参画にかかわる各種提案を実現させている。これらの功績は特に顕著なものであり、澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞としてここに顕彰する。

B賞：澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

課題名 看護学分野における若手男性研究者として男性のケアワーク参画を支援する先導的活動
受賞者 国際医療福祉大学 成田看護学部 助教 古山 陽一 氏
講評 同氏は男性の積極的な育児参加を自ら実践するとともに、育メン講座や相談を行うなど、啓発・情報発信に努めている。このような活動は、看護学分野という、男性の割合が低い中での取り組みだけに、多大なインパクトを与えており、「男女共同参画」の環境醸成について、貢献をしていることが窺える。今後のより一層の活動を期待し、澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞としてここに顕彰する。

第4回「澤柳記念賞」受賞講演

A賞 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画賞

科学技術とジェンダー：歴史と展望の探究

国立大学法人三重大学 名誉教授 小川 眞里子氏



略歴

- 1971年6月 東京大学教養学部
基礎科学科卒業
- 1971年7月 東京大学教養学部
基礎科学科研究生
- 1972年3月 同上 修了
- 1972年4月 東京大学大学院理
学研究科科学史科学
基礎論修士課程
入学
- 1974年3月 同上 修士課程修了
- 1976年4月 東京大学大学院人
文学部研究科比較
文学比較文化博士
課程入学
- 1978年9月 同上 退学

職歴

- 1978年4月 南山短期大学非常
勤講師(1986年
3月まで)
- 1985年4月 三重大学人文学部
非常勤講師(1986
年3月まで)
- 1986年4月 三重大学人文学部
助教授
- 1993年4月 三重大学人文学部
教授(2012年3月
まで)
- 2012年4月 三重大学名誉教授

講演要旨

科学技術とジェンダー

私は19世紀の医学史・生物学史の研究をしてきており、ジェンダー学の専門家ではありませんが、「科学技術とジェンダー」というやや特殊な分野に関わってきましたので、少しお話をしてみたいと思います。

この分野に関わるきっかけは、ロンダ・シービンガーの『The Mind Has No Sex?』の翻訳(1992年)や『Nature's Body』の翻訳(1996年)を行ったことにあります。これらを通して「科学とジェンダー」という科学史の新領域の成果に学び、日本の状況も加えて『フェミニズムと科学/技術』(2001年)を著したことが出発点になりました。

この領域の世界的広がりについては、2001-02年の振興調整費「科学技術分野における女性研究者の能力発揮」の委員としてECの研究総局を訪問したり、2005年にOECDと仏政府による共同国際会議に派遣されたりして知りました。この間に学んだECの綿密なジェンダー統計に深い感銘を受け、わが国における統計整備を強く願ってきました。

統計による正確な現状認識に立って「女性研究者支援モデル育成事業」のような人材育成に向けた努力は、科学技術分野での男女共同参画を実現するために重要であり、教育やネットワークの必要は言うまでもありません。それに加えて、科学や技術がもたらす恩恵が男女に平等であるべきというのが、ジェンダード・イノベーションです。「科学技術とジェンダー」が、科学技術分野の人材問題や過去の科学知識のバイアスを問題にするだけでなく、現在の科学や技術にセックス分析、ジェンダー分析を応用することによって、科学や技術に革新をもたらそうと言うのです。この発想に期待し、ご紹介したいと思います。

主な活動・著書

- お茶大 COE (ジェンダー研究のフロンティア) 事業推進者(2003年9月～2006年3月)
- お茶大 ジェンダー研究センター客員教授(2006年4月～2012年3月)
- 三重大学 学長補佐(2007年度 入試広報・男女共同参画担当、2008年度 男女共同参画担当、2009～2010年度 女性研究者支援担当)
- 三重大学女性研究者支援室室長(2008年7月～2011年3月)
- 三重県男女共同参画審議会会長(2015年4月より)
- 名古屋大学非常勤講師(科学技術とジェンダー 担当)
- 日本学術会議 連携会員(2006年8月～2011年9月)ジェンダー部会所属
- 第12回東北大学男女共同参画シンポジウム「科学とジェンダー」特別講演
東北大学医学部開設百周年記念ホール 2015年11月21日
- 講演「科学史から見た男女総活躍の意義」第46回日本腎臓学会東部学術大会
東京 京王プラザホテル 2016年10月8日
- JAWRO 特別講演「ジェンダーは科学にどうかかわるか」第76回 日本医学放射線学会総会
横浜 パシフィコ横浜 2017年4月15日

第4回「澤柳記念賞」受賞講演



略歴

1979年、福岡県北九州市生まれ。立命館大学経営学部卒業後、滋賀県立総合保健専門学校卒。看護師として大阪市立大学医学部附属病院に在職中の2012年8月より、NPO 団体パパの育児休業支援センター（現：パパの育児・看護・介護支援センター）を設立。男性看護師による父親支援の取組として、新聞をはじめとするジャーナリズムや日本看護協会機関誌『看護』（2015年2月号）の「かお」欄等でも活動が紹介される。

2016年、大阪市立大学大学院創造都市研究科修士課程修了。同年4月より、国際医療福祉大学成田看護学部助教（基礎看護学）に着任。他に、全国男性看護師会交流委員会副委員長（2017年4月～現在）、阿倍野区子育て支援連絡会運営委員（2015年4月～2016年3月）等も務める。

男性の看護学教員ならではの経験と専門知識や技術に基づいた講演・研修等を各地で行い、パパの育児・看護・介護への参画支援に取り組んでいる。家庭では、現在5歳の娘と2歳の息子の育児に携わり、子どもの誕生時には2子で合計6か月の「育休」を取得した。看護学の探究を通じ、性別にとらわれず生きることができる社会への実践を目指して、日々奮闘中。

B賞 澤柳政太郎記念東北大学男女共同参画奨励賞

看護学分野における若手男性研究者として
男性のケアワーク参画を支援する先導的活動

国際医療福祉大学 成田看護学部 助教 古山 陽一氏

講演要旨

「男性性」の看護学教員による男女共同参画を志向した取組と提言

本講演では、看護学の男性教員としての立ち位置から、「男性性」と「第二ステージへの移行」をキーワードとして、(1)自身の取組を紹介すると共に、(2)大学における男女共同参画の推進に向けた提言についても述べておきたい。

(1)歴史的に、「女性化された職業」の最たるものとして、「看護師」は挙げられるだろう。現状において、その男性化は1割にも達していない。こうした中、「男性性」の看護師として、女性看護師と臨床の場において等しくケア (care) に携わってきた経験と専門知識や技術に基づいた講演・研修を各地で行い、男性のケアワーク (育児・看護・介護) への参画支援に取り組んできた。

また、当該取組で志向したものは、男性を対象とした男女共同参画の推進における「第二ステージへの移行」である。すなわち、男性の育児・看護・介護への参画支援を、女性のサポート役としてではなく、主たるケアの担い手としての支援に移行させることであった。同時にそれは、「女性性」がこれまで「働く」ことから排除されてきたとするならば、「男性性」もまた「ケアする」ことから遠ざけられてきた現実があること、それを前提とすれば「女性化された職業」としての「看護師」、すなわち「ケア」における「性・生・制」についての問い直しを求めた取組であったとも言える。

(2)他方、大学における男女共同参画の推進においても、「第二ステージへの移行」が志向されるべきだろう。今後は、大学全体としては女性教員の登用を進めつつも、例えば「看護学」のような「女性性」に偏った学問領域については、男性教員や男子学生比率向上のための取組が推進される等、その意味の実質化を期待したい。

主な活動等

市民等を対象とした男女共同参画講座

- 「男女共生市民講座」講師（主催：新潟県新発田市、2017年12月2日）
- 「男女共同参画推進セミナー」講師（主催：奈良県、2016年6月4日）
- 「ロールモデル・セミナー」講師（主催：大阪市立大学女性研究者支援室、2015年6月24日）
- 「子育てを楽しみたいパパのための Papa カレッジ」講師（主催：京都市、2015年2月21日）
- 「『あべの』のパパ向け子育て講座」講師（主催：大阪市立阿倍野市民学習センター、2015年2月14日） 等多数

専門誌・新聞等からの取材歴

- 「かお 古山陽一さん」『看護』（発行：日本看護協会出版会、2015年1月20日）
- 「このひと 古山陽一さん」『ウィラール』（発行：日本女性学習財団、2013年11月22日）
- 日本経済新聞「『女性活躍』実現しますか」（夕刊・大阪版社会面、2015年11月21日）
- 読売新聞「パパの育休 相談乗るで〜」（朝刊・大阪本社版くらし面、2013年1月18日） 等多数

東北大学における男女共同参画の取り組みについて

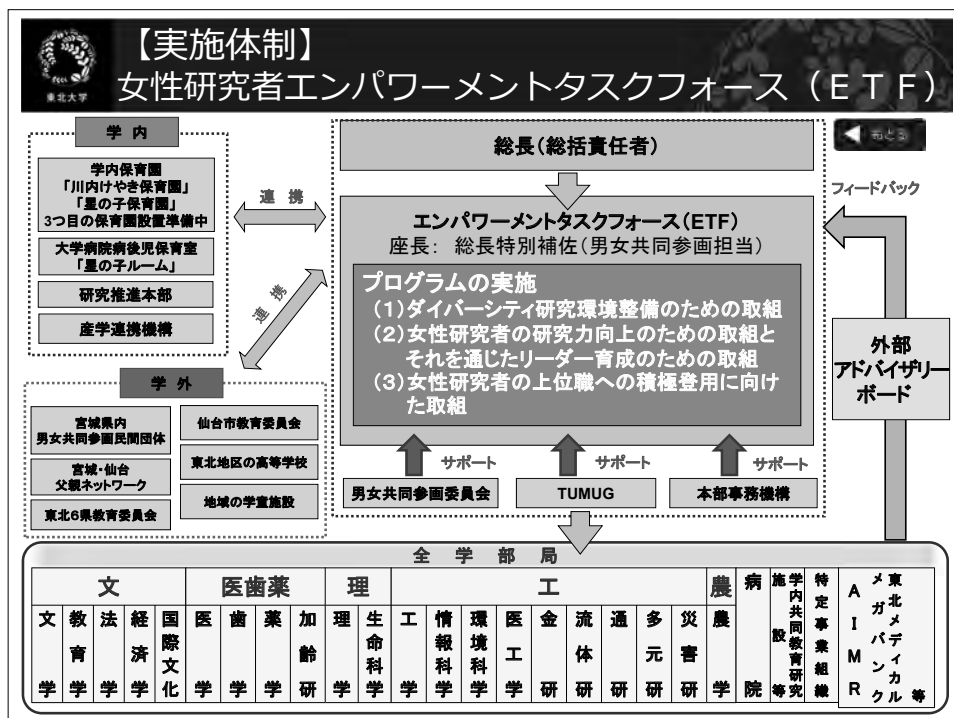


男女共同参画委員会副委員長
 男女共同参画推進センター 副センター長
 医工学研究科/工学研究科 教授
田中 真美

東北大学では、男女共同参画の実現に向けた委員会活動とともに、女性研究者がキャリアパスの障害を乗り越えるための支援として、平成18-20年度に「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者支援モデル育成）、平成21-25年度に「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」（文部科学省科学技術振興調整費：女性研究者養成システム改革加速事業、現科学技術人材育成費補助金）を実施してきた。こうした経緯を経て、現在は平成28年度から採択された「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」（科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」）を実施している。この事業は、研究環境のダイバーシティを高め、優れた研究成果の創出につなげるため、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備や、研究力向上のための取組、および上位職への積極採用に向けた取組を支援するものである。

「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業」の目標を実現すべく、今年度本学では「東北大学女性教員採用促進事業」を確立した。この事業は、(1-1) 部局と全学の連携による女性教員採用促進策「部局公募型」、(1-2) 「国際公募型」、(2) ポス্টアップによる女性研究者の上位職移行策、(3) 各部局の特性を生かした努力に対する促進策、の4種類で構成され、優秀な女性研究者を採用・登用し、長期に渡り安定かつ自立して研究を実施できる環境を整えることを目的としている。加えて今年度は、東北大学優秀女性研究者賞「紫千代萩賞」も開始、優れた研究を展開する女性研究者の活躍を讃えることで、世界トップリーダーとなるような女性研究者の育成を目指している。こうした一連の取組を通し、今後も一層、男女共同参画の推進を図っていく予定である。

図 杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業実施体制



特別講演



略歴

- 1996年 ジュネーブ大学教育学博士課程修了、教育学博士取得。
- 1997年 同大学経済学博士課程修了、経済学博士取得。
- 1998年 ジュネーブ大学経済学部助教授。
- 2001年 経済産業研究所研究員。
- 2002年 東北大学大学院工学研究科教授に就任、科学技術イノベーション政策、産学連携、大学改革などに関する教育・研究に従事。
- 2006年 総合科学技術会議非常勤議員。(～2008年)
- 2009年 科学技術振興機構特任フェロー。(～2010年)
- 2010年 経済協力開発機構(OECD)の科学技術産業局次長。(～2012年)
- 2013年 総合科学技術・イノベーション会議常勤議員に就任。
東北大学名誉教授

変わりゆく社会に「人」の普遍性を探る ～ジェンダーの視点から～

内閣府総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員 原山 優子氏

講演要旨

ヒトが人として存在し、そして様々な場所で人々の共同体たる社会が形成されていく中で、特有な価値観が生成され、その多くは社会の絆としての役割を担うようになっていった。価値観を共有する事が、その社会の一員である事の証となり、社会を潤滑に機能させるに欠かせない要素となり、時として普遍であるがごとく振る舞うようになる。

しかし、人類の歴史が示すように、それぞれの社会が持つ価値観は、時にはぶつかり合い、時には共有され、またその相互作用の中から新たな価値観が誕生することすらある。要は、時とともに、また様々な経路を辿り、価値観は進化してきたのである。

ジェンダーを語るにあたっては、今日我々が向き合う価値観は、社会が生み出したものであり、それ故、変える事が可能であり、また進化しうるものであることの、再確認が欠かせない。

そもそも生命体は進化する中で「性」を獲得したわけだが、このメカニズムは生命体の存続を守る術でもあり、そこに多様性の価値を見いだす事ができる。ヒトも例外ではない。しかし、人が創作した社会においては、様々な役割分担がその発展を効果的に支えてきたが故に、時として、人々の属性による役割の固定化を促した。

このような認識のもと、本講演では今日ジェンダーが内包する課題の再考を試みる。

主な活動・著書

- 2009/10月(第3巻第2号)横幹
「女性研究者」が内包する課題とは？
- 2015/06月号(no.580)技術と経済
女性に選択肢を与える社会システム
- 2015/8/15
Gender Summit 6(ソウル)
Plenary Panel 5: Developing Leadership Capacity for Gendered Innovations through Scientific, Technology and Policy Networks
パネリスト
- 2015/10/17
第13回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム
「国際的視点から見た男女共同参画の推進」
ビデオメッセージ
- 2015/12/20
日本学術会議 学術フォーラム
日本の戦略としての学術・科学技術における男女共同参画
- 「第4次男女共同参画基本計画」との関わりで -
パネリスト
- 2017/5/26
ジェンダーサミット10(東京)
Plenary 4: Social Responsibilities of Science
チェアー
- 2017/10/14
第15回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム(東京)
ダイバーシティ推進における産学の取り組み
パネリスト

パネルディスカッション

性を生かす制! ?

パネリスト：丸の内の森レディースクリニック 医師 宋 美玄氏

講演要旨

産科女医の「産んでも働く」を阻むもの

産婦人科医は全国で慢性的に不足しており、相当の割合を占める女性医師が妊娠・出産で現場を離脱することが以前から「問題視」されている。女性医師のやる気の問題に帰結されがちであったが、女性医師の妊娠出産育児と仕事の両立を阻むものが浮き彫りになって来た。保育園不足や、夜間保育の欠如のために女性医師が激務の現場に復帰できないことなどが原因とされることが多いが、本質的な問題は違うところにある。

子供の父親（医師であることも多い）の当事者意識の欠如だと私は考える。女性医師が産後に職場復帰する際、時短勤務や、週1〜3日のパートタイム勤務、当直・残業免除などの形態をとることが多い。これは、女性医師の「わがまま」のように見られることもあるが、実態は「子供の父親が今までのペースで働けるように、家事も育児も母親がほとんど担われる」ための勤務形態である。しかし、医師の世界ではこのような働き方しかできない医師には大きな仕事ややりがいのある仕事を任せられなくなっており、時間をお金に換えることはできても、残念ながらキャリアは中断もしくは放棄となるのが現実である。子供を産み育てながら働く女性医師たちの地位は、子育てに参画しない医師たちと同じ働きをしない限り、低い。

解決法としては少子化対策として勧められている、働き方改革により長時間労働を是正し、父親の育児参画を押し進めることが重要であるが、父親の職種が人手不足の場合はすぐに実現することが難しいのも現実である。職業に関わらず、多くの母親が強いられている自己犠牲や家事のコストをヘルパーなどによって軽減させる制度を自治体や職場が提供することは現実的な手段の一つとなりうるが、長時間労働を解決しなければいけないことは他の業種と同様である。

主な活動・著書

- ・森まさこ少子化担当大臣の少子化危機突破タスクフォースのメンバーとして、晩婚化晩産化により欲しい数の子供を持ってなくなっている現状を多面的に解決するための議論に参加。働き方改革、子育て支援に加え、生殖に関する基礎知識の教育について各分野の有識者たちと話し合いました。
- ・一般財団法人Imore baby 応援団の評議員としても活動し、静岡県などで産後の母体について、男性の育児参加について、啓発を行っています。女性の健康に関する基礎知識、働く女性のライフプランニング、母乳育児、妊娠出産、生理的なお産、少子化について、性と健康、ヘルスリテラシーなど多様なテーマで講演活動を行っています。
- ・今年9月に丸の内の森レディースクリニックを丸の内に開院してからは、三菱地所の働く人の健康とQOLを向上するプロジェクト「クルソグ」にも参画しています。



略歴

平成6年3月	私立神戸女学院高等学部卒業
平成7年4月	大阪大学医学部医学科入学
平成13年3月	大阪大学医学部医学科卒業
平成17年6月	大阪大学大学院医学系研究科研究生(産婦人科学教室)入学
平成18年10月	大阪大学大学院医学系研究科研究室(産婦人科学教室)修了
平成23年4月	川崎医科大学大学院(組織培養・免疫系分野周産期・生殖・腫瘍免疫学)入学
平成27年3月	川崎医科大学大学院(組織培養・免疫系分野周産期・生殖・腫瘍免疫学)卒業
平成13年6月	大阪大学医学部附属病院産婦人科研修医勤務
平成14年5月	大阪大学医学部附属病院産婦人科研修医退職
平成14年6月	市立箕面病院産婦人科レジデント(産婦人科)勤務
平成15年5月	市立箕面病院産婦人科レジデント(産婦人科)退職
平成15年6月	市立泉佐野病院産婦人科医員(産婦人科)勤務
平成17年5月	市立泉佐野病院産婦人科医員(産婦人科)勤務
平成18年11月	川崎医科大学臨床助手(産婦人科)および同附属病院シニアレジデント勤務
平成19年4月	川崎医科大学講師(産婦人科)に職名変更
平成21年2月	川崎医科大学講師(産婦人科)および同附属病院医長退職
平成21年5月	ロンドン大学病院 Researching Fellow 勤務
平成21年12月	ロンドン大学病院 Researching Fellow 退職
平成22年1月	私立ベルランド総合病院産婦人科医員勤務
平成22年7月	私立ベルランド総合病院産婦人科医員退職
平成22年8月	私立国際親善病院産婦人科医長勤務
平成22年8月	私立国際親善病院産婦人科医長退職
平成27年4月	池袋クリニック、広尾レディース、FMC東京クリニックで非常勤勤務

パネルディスカッション



略歴

- 1987年4月 東北大学大学院理学研究科地学専攻入学
- 1992年8月 ゲイ・サークル「E-betcha (いいべっちゃ)」設立
- 1993年12月 東北 HIV コミュニケーションズ設立
- 2003年1月 同 代表就任
- 2003年4月 仙台市 HIV 性感染症対策推進協議会委員
- 2004年4月 男性同性間 HIV 感染対策グループ「やろっこ」設立
- 2005年4月 厚生労働省エイズ対策研究事業 男性同性間 HIV 感染対策に関する研究 研究 協力者
- 2005年10月 みやぎいのちと人権リソースセンター設立 共同代表
- 2013年 レインボーアーカイブ東北設立
- 2014年6月 一般社団法人プレスみやぎ設立 理事
- 2015年4月 レインボー・アドボケイツ東北設立 代表

性を生かす制! ?

パネリスト：東北 HIV コミュニケーションズ代表 レインボー・アドボケイツ東北代表 小浜 耕治氏

講演要旨

男女を再構築しなさい～性的マイノリティから見た男女共同参画のこれから～

性は本来男女の二項対立では語れるものではない。しかし男女共同参画は、往々にしてシスジェンダー、ヘテロセクシュアル中心主義を強化し、より多様な性を不可視化し、無視し、抑圧することともなってきた。

性的マイノリティに関して、日本でも1990年代にクイアムーブメントが起こり、2000年前後に公的制度に組み入れられはじめた。その後、震災前後にオバマ政権のD&I施策が波及し多くの当事者活動が活性化して、国や自治体文書へ明記されるようになった。よりよいホットラインにセクシュアルマイノリティ専門ラインが設置されたり、渋谷区などのパートナーシップ証明がはじまるなど、社会的制度の中に性的マイノリティが位置づけられ始めた。

これらは多様な性に基づくより広範な性の平等が必要ではないか、と問いかけているといえよう。しかし、性的マイノリティよりまず女性の問題解決が先などと、公的な制度の中で性的マイノリティの状況を変えようとする動きは希薄だった。男女共同参画の外側にある特別なグループの課題とされ、手をつけられなかったといえる。異性愛シスジェンダー男性・女性に限定されてきた制度が、ここに至ってやっと多様な性の主体：トランスジェンダーや同性愛者、両性愛者に開かれることとなったわけである。

「女性」からの視点でDVや性被害、職域等の社会参加における不平等が指摘され、これら乗り越えるための制度が作られてきたが、これらの課題は実存としての男女の対立によるものではなく、支配被支配の問題、多様性と包摂の課題である。同性カップルにおけるDV、性被害における男性被害者、トランスジェンダーの就職困難など、男女の二項対立の制度に押し込められている様が顕在化してきている。単に対象者の多寡の問題でなく精度の問題として、従来の施策を見直すことが求められているのではと考える。

男女という存在を、社会的に構築されたジェンダーの概念によって流動化するのに留まらず、より多数の要素からなる性に基づいた制度設計への転換が求められている。多様な性を生かす制を、共に考えられたらと思う。

主な活動・著書

- ・1992年に、ゲイ・サークル「E-betcha (いいべっちゃ)」を立ち上げ、以後セクシュアリティに関する活動を継続する。
- ・1993年、東北 HIV コミュニケーションズの立ち上げに関わる。96年から仙台市との協働事業「世界エイズデーせんだい」に従事。
- ・2003年～2006年、仙台市 HIV・性感染症対策推進協議会委員。
- ・2004年、男性同性間 HIV 感染対策のためのボランティアグループ「やろっこ」を設立。翌年から厚生労働省エイズ対策研究事業の研究協力者として活動する。
- ・2013年から宮城学院女子大学、宮城大学、東北学院大学などで性の多様性に関する授業に協力。同、レインボーアーカイブ東北を設立し、震災時の多様な性の当事者に関して活動。
- ・2014年 SYNODOS:「多様な性の当事者たち」にとっての東日本大震災とは？
<https://synodos.jp/society/11933>
- ・2015年、レインボー・アドボケイツ東北、設立。
- ・2016年、OUT IN JAPAN 東北プロジェクト実行委員長。
- ・2017年、宮城県・仙台市職員研修で研修講師を務める。同、富山大学人文学部 公開シンポジウムにて講演「地方の性的マイノリティが社会化すること～東北地方自治体の男女共同参画基本計画策定への政策提言と官民協働の相談支援体制の構築を例に」。
<http://www.diversitylounge.jp/2017/09/17/sympo-end/>

パネルディスカッション

性を生かす制! ?

パネリスト：東北大学経済学研究科 高齢経済社会研究センター長 教授 吉田 浩氏



略 歴

- 1983年 新潟県立新潟高等学校卒業
- 1987年 一橋大学経済学部卒業
- 1995年 一橋大学経済学研究科後期博士課程満期退学
- 1995年 明海大学経済学部 専任講師
- 1997年 東北大学経済学研究科助教授 加齢経済担当
- 2005年 オスロ大学・ストックホルム商科大学在外研究
- 2006年 東北大学総長特任補佐
- 2007年 東北大学経済学研究科教授(現職)
- 2013年 東北大学災害科学国際研究所教授(兼)
- 2015年 東北大学経済学研究科高齢経済社会研究センター長

役 職

会計検査院第9代特別研究官、経済企画庁経済審議会特別委員、仙台市消費者保護委員会副委員長、放送大学宮城学習センター客員教授、国立大学財務・経営センター客員教授、仙台市消費生活審議会会長、富谷町まちづくり審議会会長を歴任。仙台市社会福祉審議会委員。同児童福祉分科会会長。

講演要旨

女性の活躍が高齢社会の日本の生を救う社会制度の必要性

この講演では、たとえ「憲法に男女平等が書いてなくても」男女共同参画を行う必要性について、日本の高齢化と経済学の観点から考えます。

はじめに、男女共同参画を社会全体に広めるために、どのような戦略をとるべきかを考えます。その中で、経済学の考え方をうまく応用することが効果的なのではないかという視点を提供します。公平と効率はしばしば対立する概念ですが、効率をうまく使えば、より少ないエネルギーで公平を達成することも可能です。

ここでは、いくつかの例として、「カネ儲けが大好きな社長に女性をもっと雇用させる妥当性」に関する資料を提供します。また、「男女平等度の国際ランキング (Global Gender Gap Report) で100位以下である理由」について、その要因を探ります。さらに「日本の経済成長によって女性雇用の拡大が有利な必然性」について、日本の産業構造から確認します。そして、「ワーク・ライフ・バランスを実現するための現実的方法」について、経済学的視点で解決策を考えます。そして、世界幸福度ランキング (World Happiness Report) を用いて、男女共同参画と国民の幸福度の符合性についても確認します。

以上のことを踏まえ、安倍ノミクスの新・3本の矢で掲げられている「GDP600兆円」、「希望出生率1.8」、「介護離職ゼロ」は何れも女性の社会参加と男女共同参画なくしては達成されないことを示し、女性の活躍が高齢社会の日本の生を救う社会制度の必要性に関し、根拠を以って議論できるためのエビデンスを提示していきたいと思います。

主な活動・著書

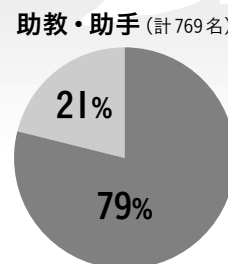
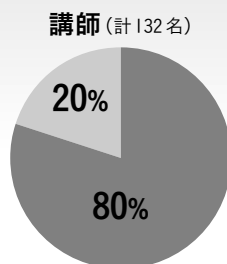
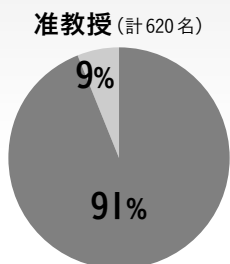
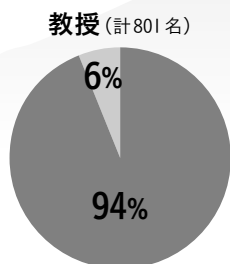
- ・東北大学 「ジェンダーと人間社会」講師(継続中)
- ・2016年6月17日(金)第41回東北大学リベラルアーツサロン「男女共同参画の経済科学」講演
- ・吉田 浩著『男女共同参画による日本社会の経済経営地域活性化戦略』(河北新報出版センター 2013年)
- ・2010年 都道府県男女平等度ランキング発表(東北大学グローバル COE プログラム「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」)
- ・2006年10月 東北大学平成18年度男女共同参画奨励賞(沢柳賞) 研究部門賞受賞

東北大学における男女構成比と推移

平成29年5月1日現在

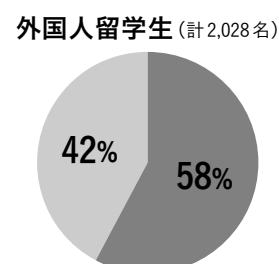
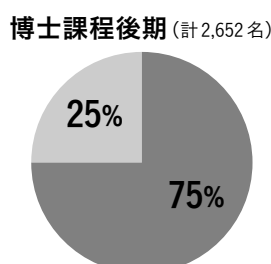
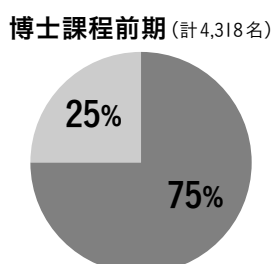
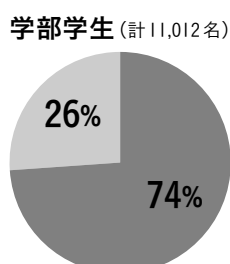
教員男女構成比

■男性 ■女性



学生男女構成比

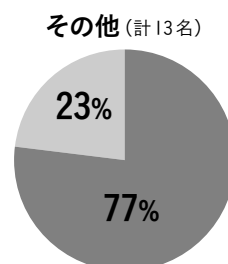
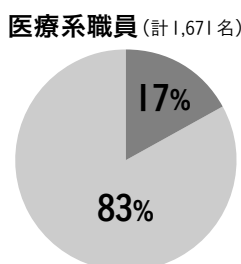
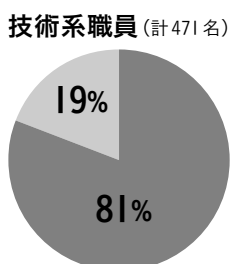
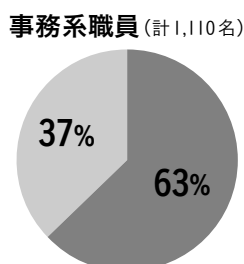
■男性 ■女性



※外国人留学生の数は学部学生・博士課程の内数

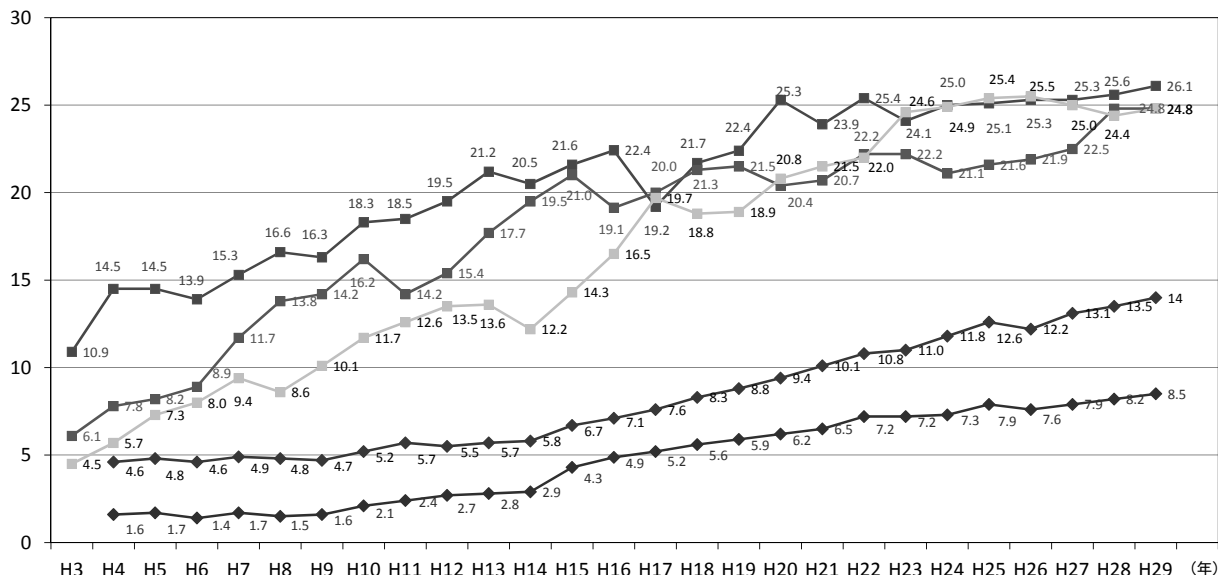
職員男女構成比

■男性 ■女性



男女構成比推移

■学士 ■修士 ■博士 ◆教員(助教・助手含む) ◆教員(助教・助手除く)



東北大学における 男女共同参画推進のための行動指針

東北大学は、1913年に日本で初めて女子学生3名の入学を許可した。その3名はやがて女性初の学士になるなど、本学は女性研究者育成の歴史に大きな足跡を残している。そのような歴史の中、戦前にあっては学問を志す全国の女性が「学都仙台」に集い、本学は帝国大学の中で最も多くの女子学生を輩出した。

そして、2001年に全国に先駆けて東北大学男女共同参画委員会を発足させ、「男女共同参画のための東北大学宣言」(2002年)のもと、全学的な男女共同参画の推進に向けた活動として、学内の環境整備や意識改革、学内外広報等に努めてきた。

また、2003年度に21世紀COE「男女共同参画社会の法と政策」が、2008年度にはその成果を発展させたグローバルCOE「グローバル時代の男女共同参画と多文化共生」が採択された。これらは、男女共同参画とダイバーシティ研究・教育のためのプログラムであり、研究・教育における男女共同参画の取り組みも全国に先駆けて進めている。

自然科学系分野では、2006年度から「杜の都女性科学者ハードリング支援事業」を展開し、環境整備や次世代育成等に取り組むとともに、2009年度からは「杜の都ジャンプアップ事業 for 2013」により、理工農学分野の女性研究者の採用を促進し、そのリーダー育成を推進している。

このように、男女共同参画の包括的推進(理論整備・活動支援)において、我が国をリードする活動を展開している本学は、女子学生入学100年の歴史と背景をもとに、建学以来の理念の一つである「門戸開放」を継承する男女共同参画について、今後10年間の行動指針として以下の7項目を策定する。

■両立支援・環境整備

本学構成員が、年齢性別等を問わず、仕事や学業と生活との両立を図ることができるように、意識の醸成に努め、子育て支援のための学内施設の充実や介護支援を含めた制度等の環境整備と周知を進める。

■女性リーダー育成

アカデミアにおける男女共同参画の推進に向けて、女性研究者を積極的に採用・養成し、さらに学内および学会・社会のリーダーとして飛躍させるための支援・登用制度を整備する。

■次世代育成

将来性豊かな次世代女性研究者を輩出するために、サイエンス・エンジェル(SA)活動を継続・発展することなどにより、学部生・大学院生を対象とした研究者使命の意識啓発と醸成に努め、さらに実体験を通して育成する施策を推進する。

■顕彰制度

アカデミアにおける男女共同参画の先駆として、各分野で活躍し多大な貢献をなした方々を選考し顕彰するため、新たな「東北大学男女共同参画賞」を創設する。

■地域連携

東北地方の中心に位置する大学として、東北地方の多くの大学、行政機関等との連携を進め、地域発展や震災復興事業等における男女共同参画を推進する。

■国際化対応

ワールドクラスへの飛躍に向けて、グローバルな研究・教育体制に相応しい、外国人研究者・留学生を対象とした様々な両立支援策を講じ、国際的観点に基づいて学内の男女共同参画を推進する。

■支援推進体制

上記の男女共同参画活動を円滑に推進するために、男女共同参画担当理事(若しくは副学長)と総長特別補佐(男女共同参画担当)を置き、さらに「男女共同参画推進センター」などの恒常的支援体制を整備する。